

Vol.
23&24

人社研 Newsletter



2009（H21）年度
後半期博士学位取得
（社会文化科学研究科及び
人文社会科学研究科後期課程）



2010（H22）年度
前半期博士学位取得
（社会文化科学研究科及び
人文社会科学研究科後期課程）

目次

巻頭辞	2
2009年度後半期及び2010年度前半期学位授与式	3
2010年度新規科目担当者	5
2010年度新任助教	5

科学研究費（新規）プロジェクト	5
所属教員による出版物	6
博士後期課程大学院生の研究業績	8

東北・関東大震災によせて

人文社会科学研究科長 石田 憲
(兼・社会文化科学研究科長)

3月11日に東北・関東大震災が発生して1週間が経過して、この文章を書いています。被災に直接遭われた方々、近しい人が被害に遭われた方々に、心よりお見舞いを申し上げます。人文科学がhumanityという問題を考える学問であるとすれば、まさに今日その根源的なところを問われているのかも知れません。それは、自己および他者を理解する試みと考えられます。ちょうど25年前、チェルノブイリ原発事故当時、私はヨーロッパに滞在しており、異邦人として放射能の雲がヨーロッパ中を席卷する状況に遭遇しました。これは、現在、博士前期課程では約三分の一を占める留学生が直面している状態と似ています。四半世紀前に比べれば情報量は格段に増えていますが、どの情報を信じ、何を選択したらよいのかという問題は解決された訳ではありません。同質の仲間によってのみ連帯は達成されるのではなく、自己と異なる他者を認識、尊重しながら築きあげられるのではないかと思います。しかも、何がより重要なのかを選び、優先順位を考えながら行動していくことが必要でしょう。私自身、この2年間、研究科長として、むしろ出来るだけ横並びにしておくことを旨として、多くの場合、瑣末なアリバイ作りを続けてきたという反省があります。人の生命、尊厳を最優先にし、自己と他者の相互理解に努めることこそ、今、私たちに求められていると痛感しています。具体的には、もし回りに留学生の方がおられたら話をし、コミュニケーションに努めることは重要です。これは日本人同士であっても同様です。話すことで孤立感は和らぎ、他者を意識し、初めて自分の位置も見えてくる可能性があります。

社会科学という観点から言えば、私たちは16年前の関西・淡路大震災からどれだけのことを具体的に学んでいたのかという問題があります。これも、当時、最初の就職先であった大阪市立大学で震災前後の状況を目の当たりにするという体験から考えさせられます。神戸という地域的特性もあり、外国人の方々については、今日以上に注目されていました。しかし、必ずしもその経験は今のところ生かされているようには見えません。東北・関東大震災の場合は、原発という全く新しい問題が加わったことも無論、影響していますが、コミュニケーション、優先順位を社会的なシステムとして、どのように機能させていくのか、という問題については、共通しているはずです。現段階で、誰が悪いという犯人探しをする必要はありませんが、今後落ち着いた段階においては、天災という文脈ではない人災の側面から、多くの検証が必要になってくるはずです。問題を政治・経済・社会の中で、長いタイムスパンから客観的に分析する試みは、将来の悲劇を防ぐ上でも不可欠と言えます。相対化の視点は、これから生じてくるであろう多くの課題に取り組むためにも、重要となるでしょう。仮に問題解決へと直結しない場合でも、自らが社会と向き合っていく位置づけのヒントを与えてくれるはずです。復興過程では、コミュニケーションをとるという行為から、積極的に状況へ関わっていくという選択も出てくるかも知れません。大阪市立大学時代には、多くの院生が復興のボランティアに参加していったことが思い出されます。無論、具体的な行動だけが全てではありません。自らの問題として、今日の状況をきちんと考え、分析していくことは、研究・教育機関の本務でもあるからです。

自分自身を省みて、考え、執筆し、授業をすることが本業になってしまうと、具体的な行動とはかけ離れてしまう部分は否めません。まして、実際、多くの人にこれをすべきであるという呼びかけは意味をなしません。むしろ、何を考え何をどのようにするかというのは、人文社会科学的文脈からも、個人がまさに決めるべき内容だからです。現在の苦難をどのように協力して乗り越え、異なる個人が様々な選択をしながら、いかなる新しい社会を作っていくのかこそ、今、私たちそれぞれの課題になっています。

2009（H21）年度後半期学位授与式および修了者祝賀会

2010年3月26日、けやき会館において学位授与式が行われ、以下に掲載する6名の方が社会文化科学研究科を修了して学位（博士）を、1名の方が論文提出により学位（博士）を、7名の方が人文社会科学研究科博士後期課程を修了して学位（博士）を、52名の方が人文社会科学研究科博士前期課程を修了して学位（修士）を取得されました。

また、学位授与式後、人文社会科学系総合研究棟4階の千葉大学生活協同組合カフェテリアにおいて修了祝賀会が催されました（右写真）。



2009年度後半期社会文化科学研究科修了者（2010年3月）

氏名	博士論文題名	取得学位
朱 武平	現代日本語における副助辞・係助辞の構文論的研究	博士（文学）
菊地浩平	手話会話におけるターン・テイキング・メカニズム	博士（学術）
斯 琴	アラシャ・モンゴルの物語性をもつ口承文芸の研究－アルタイ山脈の故地におけるモンゴル系諸集団との比較を通して－	博士（文学）
池田直子	ムガル皇帝ジャハーンギールの肖像画－近世における帝国の王権表象－	博士（文学）
吉良智子	近代日本の戦時美術と女性－女性美術家のネットワーク構築と表現活動をめぐって	博士（文学）
角田季美枝	流域環境政策論	博士（学術）

2008年度後半期社会文化科学研究科論文提出による学位取得者（2010年3月）

氏名	博士論文題名	取得学位
丹菊逸治	ニヴフとアイヌの異類婚譚	博士（文学）

2008年度後半期人文社会科学研究科後期課程修了者（2010年3月）

氏名	博士論文題名	取得学位
オアオ・シェラ・ガムト	Teaching elementary science through hands-on investigation in the Philippine	博士（学術）
三浦朋子	社会システム形成学習のための教材開発－法化社会の動態的認識を前提として－	博士（学術）
張 嵐	日本と中国における「中国残留孤児」三世代に関する社会学的考察－生活史とアイデンティティの視点から－	博士（学術）
西向勇氣子	「身体」の法的性質	博士（法学）
李 文哲	中国朝鮮族における延辺テレビの意味	博士（学術）
呉 哲	契約締結上の過失に関する一考察－諸国の立法・判例から中国法への示唆－	博士（法学）
戴 松林	梶井基次郎の創作方法の研究－体験主義文学の系譜との関わりを中心に－	博士（文学）

人文社会科学研究科博士前期課程学位（修士）取得者（2010年3月）

関根 豊	小藤田啓子	五味俊晶	鳥羽厚郎
橋爪瑞希	桑田京香	高橋一矢	金内真衣
太田智子	山下智加	白 根小	久保篤子
鄒 暁依	武田英里子	梁 愛華	長谷川 潤
徳部 則之	鈴木 航	間 永次郎	中井良太
進藤仁美	梁 春慧	魯 迪	松尾やす子
藤生 雄太	佐藤 啓太	グエン デイン ユイ	原口 悠
山田彩加	イリチ	大西拓見	遅 家康
林 咲子	池田裕一	陳 文如	ジエトニ ピアルン
許 娜	グリジャニ アリム	裴 峰学	于 筱敏
澤山正貴	西島 寛	陳 文秀	長嶋健太郎
ラナグリ アブリミト	松川真弓	佐竹 彬	須藤信一
宮澤 圭	天本昌希	朴 香春	金 勲

2010（H22）年度前半期学位授与式および修了者祝賀会

2010年9月28日、けやき会館において学位授与式が行われ、以下に掲載する1名の方が社会文化科学研究科を修了して学位（博士）を、2名の方が人文社会科学研究科博士後期課程を修了して学位（博士）を、4名の方が人文社会科学研究科博士前期課程を修了して学位（修士）を取得されました。

また、学位授与式後、人文社会科学系総合研究棟4階の共同研究室2において修了祝賀会が催されました（右写真）。



2010年度前半期社会文化科学研究科博士後期課程修了者（2010年9月）

氏 名	論 文 表 題	取得学位
渡辺 圭	ロシア正教会の宗教思想史における讃名派問題 －「イエスの祈り」の受容の歴史をめぐって	博士（学術）

2010年度前半期人文社会科学研究科博士後期課程修了者（2010年9月）

氏 名	論文表題	取得学位
小笠原春菜	A. センとM. ヌスバウムの比較研究－自由と必要－	博士（学術）
南 鉄心	亡命する文学	博士（文学）

2010年度前半期人文社会科学研究科博士前期課程修了者（2010年9月）

金子美佐子	金 善姫	区 智堯	崔 檀悦
-------	------	------	------

2010（H22）年度前半期新規科目担当者

2009年度前半期の人文社会科学研究科新規科目担当者は以下の通りです。

課程	専攻	研究教育分野	職名	氏名	科目名
博士前期課程	地域文化形成	記録情報	准教授	兼岡理恵	日本古代文学資料論、 日本古代文学資料論演習
博士前期課程	公共研究	共生社会基盤	助教	福田友子	国際移動論
博士前期課程	社会科学研究	法学基礎論	准教授	杉本和士	民事訴訟法 民事訴訟法演習
博士前期課程	総合文化研究	比較文化	准教授	礒部智加衣	社会行動科学 社会行動科学演習
博士後期課程	公共研究	公共哲学	教授	和泉ちえ	古典ギリシア学問論
博士後期課程	公共研究	公共哲学	教授	鈴木伸枝	国際移動とジェンダーの 人類学
博士後期課程	公共研究	公共政策	教授	岡林伸幸	損害賠償法
博士後期課程	公共研究	国際公共比較	准教授	秋葉 淳	近世近代イスラーム歴史 社会論
博士後期課程	公共研究	公共教育	教授	太田邦郎	中等教育論
博士後期課程	文化科学研究	文化情報	准教授	大原祐治	日本近代文学論

2010（H22）年度新任助教

2010年4月1日付で人文社会科学研究科に助教1名が採用されました。

福田友子（ふくだ・ともこ） 助教

2010（H22）年度科学研究費新規プロジェクト

2010年度の新規採択は以下の通りです。

- 1) 代表者名
- 2) 2010年度予算額（単位は円。括弧内は間接経費を内数で示す。）

専任教員

基盤研究(C)一般

「西欧キリスト教民主主義：その「危機」と革新の可能性」

- 1) 水島治郎教授

2) 1,690,000（390,000）

研究活動スタート支援

「日本を起点としたパキスタン人移民の間接移民システムに関する社会学的研究」

- 1) 福田友子助教

2) 1,612,000（372,000）

兼任教員

- 基盤研究(B)一般 絵巻に描かれた「場」と「もの」にみる中世日本の重層的世界観に関する研究
(池田 忍文学部教授)
- 基盤研究(B)一般 擦文文化・トビニタイ文化・オホーツク文化終末期の広域編年研究
(柳澤清一文学部教授)
- 基盤研究(C)一般 房総半島における海食洞穴遺跡の研究 (岡本東三文学部教授)
- 基盤研究(C)一般 視覚探索課題を用いたカテゴリ化の比較心理学的研究(實森正子文学部教授)
- 基盤研究(C)一般 近世近代を通貫する一九世紀小説史の構築に向けた〈絵入小説〉の書誌学的研究
(高木 元文学部教授)
- 基盤研究(C)一般 アリストテレスの「エネルゲイア」概念の形而上学における現代的意義の研究
(3) (高橋久一郎文学部教授)
- 基盤研究(C)一般 戦後ドイツにおけるNationとErinnerungskultur (三宅晶子文学部教授)
- 基盤研究(C)一般 異眼間競合時の知覚に関する他覚的・瞳孔計測的研究 (木村英司文学部准教授)
- 基盤研究(C)一般 ミエン語文法の記述言語学的・歴史言語学的研究 (田口善久文学部准教授)
- 基盤研究(C)一般 近世江戸幕府「評定所」の機能に関する総合的研究 (坂本忠久法経学部教授)
- 基盤研究(C)一般 製品開発のコンセプト策定における産学連携の意義についての調査研究
(中原秀登法経学部教授)
- 基盤研究(C)一般 港湾・海事・空港を中心とした運輸行政の公法学的研究
(木村琢磨専門法務研究科教授)
- 若手研究(B) 冷戦期のアメリカにおける文化外交政策と社会運動の相関—音楽を中心に
(館 美貴子文学部准教授)
- 若手研究(B) 敗戦直後における日本文学と地方雑誌の関わりについての総合的研究
(大原祐治文学部准教授)
- 若手研究(B) 企業継承問題への民法学からの貢献—立法論を中心に
(金子敬明法経学部准教授)
- 若手研究(B) インタングブルズとしての人的資産の管理を含めた総合的業績管理システムの実態と理論 (内山哲彦法経学部准教授)

2010年1～12月

人文社会科学研究所所属教員（兼任教員を含む）による出版物

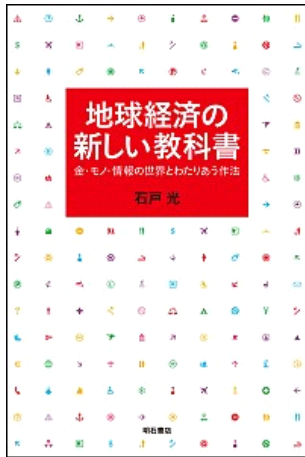
安孫子誠男・水島治郎編著『労働：公共性と労働—福祉ネクサス』勁草書房、2010年5月



千葉大学における21世紀COE「持続可能な福祉社会に向けた公共研究拠点」(2004年度～2008年度)の国際公共比較部門の研究活動の成果をまとめたものです。国際公共比較部門では、非正規雇用の増大・ワーキングプアの拡大・ワークライフバランス政策の進展をはじめとして、近年あり方が大きく変化しつつある「労働」を主要研究テーマのひとつとして設定し、「公共性」を軸に、多数の研究会を重ねてきましたが、その成果がこの本に凝縮されています。労働をめぐる問題群の多様性を反映し、経済学・政治学・法学・歴史学などさまざまな専門の執筆者が加わり、学際的な研究書となっています。

「持続可能な福祉社会」というコンセプトを軸に、環境・福祉・経済を統合した新たな社会ビジョンを提示するシリーズ[持続可能な福祉社会へ：公共性の視座から]の第三巻として刊行されました。

石戸 光 『地球経済の新しい教科書：金・モノ・情報の世界とわたりあう作法』 明石書店、2010年6月



地球的金融ショックや世界的不況、失業などの現況は、日本国内での同種の問題と直結している。それはかつてないほどの世界同時性、緊密な相互依存から来るものである。そのため、国内問題の糸口をつかむには、「一国（国内）経済」だけでは、既にすまなくなっている。この閉塞感を「ブレイク」するための糸口として、地球経済に目を向けることが有益なのである。本書は、国際公共性の観点を重視し、日常生活を切り開く、つまりブレイクスルーするためのなんらかのヒントを提供できないかと試みた公共市民向けの平易な著作である。

2009年一月二十日に米国の第四十四代大統領に就任したバラク・オバマ大統領は、就任演説の中で次のように語っている。”…as the world grows smaller, our common humanity shall reveal itself.” すなわち米国も含めた地球社会が一体化し「ますます小さくなっていく」のがまさに現状で、そのような場合、日本にいる私たちも入れて、「共通の人間性」を見定めていく必要が生じてくるのである。地球経済について、身近な生活の視点から考えながら、「宇宙船地球号」の乗組員として必要な「共通の人間性」を身につける第一歩になれば幸いと考えている。

読み進める中で、全体として国際経済学の基本事項をカバーすることも目指している。もとより一人の著者の視点は一面的で限られているが、この複雑怪奇な地球社会を受け止める際には、身の丈にあった単純化を行うこともまた、私たち人間も含めた生命体が生きていく選択として有益なのである。このことは実は、第三千年紀（西暦2001年からの千年間）のブレイクスルーといわれる「複雑系の理論」の主張でもある。複雑系については、本文の随所で触れている。大きな地球経済を読み解く小さな本書が千葉大学の掲げる「公共性」につき、いくらかでも資するところがあれば幸いである。

杉田克生、林雅晴監修 「イメージからせまる小児神経疾患一症例から学ぶ 診断・治療プロセス」 日本小児神経学会編集 診断と治療社、平成22年7月



従来国内国外を問わず、アトラスとして特に稀少な症例の写真、神経画像、神経生理や病理所見など視覚化できる図を掲載した書籍は散見された。ただし、実際に臨床で遭遇した症例の臨床症状、身体所見に上記視覚情報を加え、小児神経専門医がどのように診断・治療プロセスを進めるかそのコツを解説した書籍は皆無に近い。そこで発案されたのが、「脳と発達」誌巻頭に連載されている“Images in Child Neurology”である。今回は、その連載を「イメージからせまる小児神経疾患50」として書籍にまとめることになった。

書籍化にあたっては、既に掲載された30症例（脳と発達37巻3号～42巻2号まで）に加え、新たに20症例とコラムを追加し、総計50症例を収録した。本書は小児神経専門医を目指す医師だけではなく、一般の小児科医、神経内科医、小児脳神経外科医も“診断推論”能力を高められることを眼目にした。

“診断推論”は最近30年ほど欧米の心理学者を中心に盛んに研究されてきた。

「臨床診断に不可欠な思考と決断課程」と定義されている。経験豊富な臨床医は、疾患に関する情報を体制化して貯蔵する心的構造を利用して、より正しい診断に至ると考えられている。これをBoshuizenらはこの現象を“知識の被包化”と呼んでいる。症状、病態生理、疾患などいろいろなレベルで知識が“ファイル”されて活用されることが推測される。

その主旨に沿わせるため、日本小児神経学会では専門医が学ぶべき症例として、先天異常症候群、神経発生異常、先天代謝異常、神経変性疾患、神経皮膚症候群、周産期神経疾患、神経系感染症、自己免疫性神経疾患、神経系の外傷、脳腫瘍、脳血管障害、てんかん、神経筋疾患、脊髄疾患をあげている。稀少な症例に限定することなく、一般総合診療で遭遇しうる症例も数多く収載した。

中川裕『語り合うことばの力』岩波書店、2010年9月



われわれは文字に囲まれて生活している。現代社会においては、文字を読んだり書いたりできなければ勉強も仕事もできない。そればかりか、契約書も法令の文書も危険を示す表示も読めなくなれば、財産を奪われ人権を無視され、自分の命を危険にさらすことにさえなりかねない。文字を持つ人々は、文字を持たない人々、文字を読めない人々を見下し、知能が低いと思いこみ、あるいは文字を持たぬ民族を「野蛮」と決めつける。しかし、それは文字社会の中に生まれ育ち、文字を学ぶ環境をたまたま得た人々の驕りである。少し時代を遡れば文字を持たない人たちが世界の大部分を占めていたのだし、現在でも文字社会の中で生活していない人は数多い。そういった人々のことばの文化、声のみで紡ぎ上げられたコミュニケーションの文化は、文字によって築かれた文化に劣らず豊かである。

本書は文字を媒介とせぬまま、豊饒なことばの世界をはぐくんできたアイヌの人々を取りあげ、かつてアイヌ語のみで生活が行われていた頃の、ことばのいとなみを再現することを試みたものである。全4章の構成で、第1章ではアイヌの人々が自分達を取りまくもろもろの存在をカムイとなづけ、人間とカムイとがひとつの社会を作っているのという思想について解説。第2章では、死者に対しても生者と同じようにことばで語りかけ、交流する世界観について述べ、第3章では、アイヌの口承文芸の数々を紹介。第4章では、性別によることばへの関わり方の違いや、名前のつけ方などを通じて、生活の中でのことばのあり方を論じている。

なお、表紙とイラストは、ふたりの若いアイヌ人イラストレーターに協力してもらったが、表紙を担当してもらった北原次郎太氏は、千葉大学社文研の修了生で、現在北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授を務める一線の研究者である。その絵の腕前もとくと見てほしい。

2010年1～12月

博士後期課程大学院生の研究業績

(人文社会科学研究科・社会文化科学研究科)

金沢佳子

◆論文

「現代の「家名」継承―「婿」を迎えた女性を中心に、聞き取りとアンケートからの考察―」
『家族研究年報』No.35, pp61-76、家族問題研究学会（編）2010年6月18日発行

長谷川みゆき

◆論文

「「責任概念拡大への企図：犯罪を止めようとするれば出来たあなたにも責任があると言えるための法哲学的考察」研究ノート― 厳罰化とPenal Populism Populism（ポピュリズム刑事政策）と体感治安―」、『人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』、千葉大学大学院人文社会科学研究科、第185集、pp. 9-16、2010年。

◆翻訳（共訳）

哲学論集(ハイレク全集 第2期)嶋津格(監訳)、第一部 I「二つの合理主義」担当(p.3-p24)
出版社:春秋社 (2010/07) ISBN-10: 4393621948 ISBN-13: 978-4393621943

発行者 千葉大学大学院人文社会科学研究科
発行日 2011年3月29日 Phone/fax 043-290-3574
gshss412@shd.chiba-u.ac.jp